

たえと彦輔

松浦 隆行

枯れた川、ひび割れた水田、あぜ道に鍬を片手に立ちつくす。水無し村の、げにおぞましき光景なり。

寛延三年（1750年）讃岐の国高松藩は今も昔も水不足の絶えない地域である。その地の外れ牟禮村で百姓の長男として生まれた彦輔は元服前の

十五歳である。折り目も真新しい着物と袴に身を包み学問書を抱えて隣村である新田村を歩いてきた。いつもの道だが、この季節だけは特別だ。

春の日差しを受けて一面に咲き誇る菜の花畑、その黄色い海は彦輔のお気に入り場所であった。

彦輔は百姓の生まれながら、頭の良さを見抜いた資産家の祖母の助けもあって、儒学という難しい学問を習うことができた。後藤芝山を師に仰ぎ、毎日、この道を通っている。

黄色い海はいつもと同じだが、今日は彦輔にとって受難の光景となろうとしていた。

「おい、お前、百姓の彦輔やろうが」振り返るとそこには同年代の少年が四人、こちらを睨んでいる。やおら歩み寄ってくると、あつという間に彦輔を取り囲んだ。

少年たちは薄汚れた着物に、浅黒く日焼けした顔、髪はぼさぼさで明らかに侍や商人ではない。

その少年たちを避けて前に進もうとすると、それを通すまいと進路を遮る。

「彦輔、ええ着物着とるやないか、百姓には似合わんぞ」

恐怖に引きつる彦輔を挑発するように、にやにや笑っている。

「ちよつと金持ちじゃからいうて、ええ気になつとんと違うんかい、百姓は百姓らしゅう畑に出とつたらええんじや。学問なんぞ、あほするもんじや」

その中の一人が彦輔の襟をつかんで押し倒した。

「すいません」と蚊の鳴くような声しか出ない彦輔。尻持ちをついたまま、拝むように少年たちを見上げた。

それでも少年たちは罵り続ける。

「青白い顔しくさりおって、次に、この村に踏み入れたら泥水飲ますけん」

血の気の引いた彦輔の顔を殴った上、思いつき

り脇腹を蹴飛ばした。あまりの痛さに顔が歪む。転げこんだ菜の花畑でうずくまる彦輔には反撃する力も度胸もない。ただ、学問書を汚すまいと懐に抱え込むのが精いっぱいだった。

それ以後、彦輔は新田村を嫌って、少し回り道だが山沿いの高木村を通学路にしていた。小さい頃から喧嘩はめっぽう弱く、争いごとになりかけると自ら謝るが先、受難には近寄らずと決めていた。

彦輔が師として仰いだ後藤芝山は高松藩で一番といわれた儒学者である。高松藩主松平頼恭の命により、儒官として多くの学問書を執筆していた。その傍ら、侍や百姓、商人など

同士が鉞や鎌をもって睨みあっているところに出くわした。両方ともに百姓姿である。今にも殴りかからんばかりに身構えている。

最初は、罵りあいだったが、一人が石つぶてを相手側に投げたのがきっかけとなって両軍入り乱れて騒乱となった。

彦輔は、争う男達の顔が鬼に見えて怖くなり、逃げようにも足が動かない。目の前でつかみ合い、鎌で斬りつけられた返り血が、足下まで飛んでくる。そのうち、投げ飛ばされた男の巻き添えとなつて彦輔も転んでしまった。騒乱の中に巻き込まれた彦輔の襟首を男が掴み鎌を構えると、万事休すと顔が恐怖に引きつった。

自分の分け隔て無く学問を教えている。

彦輔も芝山から教えを受けられることを心から感謝していたので、遠距離を歩くことも苦痛ではなかったようだ。

芝山は、塾生の中でも群を抜いて優秀な彦輔に次々と難解な学問書を与えた。それを海綿が水を吸うがごとく頭の中に刻んでいく姿は感服するほどだ。ただ一つ、懸念されるのは——のみの心臓——、度胸もなく自信の欠片もない、ただの勉強ができる少年で終わらぬよう願うばかりであった。

そのように消極的な彦輔がいつものように高木村にさしかかると村の真ん中で数人の男

その瞬間、呼子の音が周辺に鳴り響く。

数人の村役人が、土ぼこりを巻き上げながら駆け付けてきた。剣の修行をした村役人に取り押さえられる百姓たちは、あまりに無力で、あっさり潮が引くように騒乱は収拾された。

すんでのところで命拾いした。何人かの男達がお縄になって、村役人に連れていかれるところを、ひきつった顔のまま、ただ嘔然と見ていた。

その光景を遠目で見ていた老人が彦輔に駆け寄ってきて、腰が抜けて座り込む彦輔を立ち上げらせると、汚れた着物を手で拭った。

「どこのお方か知らんが、すまんじやった。わしは、新田村の長の菊造というものです。若い者が

鍬や鎌を持って、この高木村に向かったと聞いて

追ってきたんじゃが、このありさまじゃった」

彦輔も名乗り、喧嘩の原因は何かを訪ねると

菊造は、川が枯れ田畑に引く水が無いことで

両方の村は苛立っている。特に下流の新田村は

不満が満ち満ちしていると教えてくれた。

このように農繁期に日照りが続くと必ず水の

取り合いが始まる。元々、少ない水を取り合うの

だから、争いになるのは仕方ないことだ。

新田村の惨状はひどいもので、田植えの時期

をひかえているのに、田は老女の額のようにひ

び割れて、田植えどころではないらしい。そうい

われれば、ここひと月、雨らしい雨は降っていない

い。

「この高木村には神五郎池というため池がある

んじゃが、その水は新田村も潤しておるんじや。

雨が降らず水が枯れ始めると、先に高木村が田畑

に水を引いてしまうて、この日照りじや、わしら

のような下流まで流れてくることはないんじや

よ。どうにかならんかのう」

菊造は、その場で頭を抱えた。

すぐるような相談事ではあつたが、彦輔には

知識も無く、消極的な性格から無言で立ち去る

方法しか思いつかない。

菊造はこのような若者に相談した自分が情け

ないといわんばかりに首をうなだれ、先ほどまで

騒乱があつた場所を何度もふり返りながら帰つて行った。

ある日、後藤芝山の塾で手習いを受けていた

彦輔は、あの高木村で起こつた出来事が忘れられ

なかつた。新田村と高木村の男たちが鬼と化し

て襲いかかつてきた経験は彦輔にとって衝撃で

あり手習いなど上の空、授業中にもかかわらず

外の景色をただぼーっと眺めていた。

集中力のない彦輔を見かねた芝山は、もつ

ていた扇子で彦輔の額を叩いた。

「勉強は己の心を磨く鍛錬じや。心の乱れは行動に必ず現れる。己の限界であるなら今す

ぐここを立ち去るが良い」

扇子で叩かれた痛みもさることながら、芝山の

言葉に我に帰つた彦輔は、後ずさりすると頭を

たたみにこすりつけるほどひれ伏した。

「申しわけございません。意識が遠のいておりま

した。励みますゆえ、お許しください」

これほど芝山が怒つた姿を見たことがない。

「彦輔よ、日々の努力を怠つてはならぬ。何事

も気を抜かず積み重ねることだけが己を前に進

めるのだ。わかつたな」

いつもの彦輔なら黙って聞いていただろう。し

かし、なぜか今日の彦輔は違った。日照りと水不足が人を鬼に変えてしまうという現実を知つ

てしまった彦輔に不思議な感情が芽生えていた。

「先生、新田村と高木村は日照り病に侵され田

に引く水を取り合って争いとなっております。

それが私には……」

困惑しながらも、震える声を絞り出す。言い訳

のつもりではない。純粹に出た言葉である。

芝山は今までの彦輔とは違う微妙な変化を感

じた。それが何であるかを悟っているかのごとく

微笑んで、彦輔の肩に手をやる。

「彦輔、お前はそれをどうしたいのじゃ」

「……わかりません」

自分の不思議な気持ちを整理できず、そう答えるのが精いっぱいだった。

芝山は、そのような気持ちを察してか、机の横

に座り、奇妙な質問をした。

「彦輔、水は誰のものか答えてみよ」

明確な答えが見つからず、下を向く。

「ならば、質問を変えよう、では雨は誰のものか」

暫く考え、答えを導き出す。

「先生、雨は万人全てに降りかかり、野山を潤

す源であるから生きる者全てのものです」

「そうか、ならば、お前のある井戸の水は誰

のものか」

今度はすぐに答える。

「井戸は、私の祖父の祖父が掘ったと聞いていま

す。ですから、それを受け継ぐ父のものです」

「ならば、お前の湯呑に注がれた水は、どうじゃ」

そこで彦輔は、はたと気づいた。雨も井戸の水

も湯呑の水も全て同じ水、場所や使い方で持ち主

が変わるということならば、芝山から最初に出さ

れた、水は誰のものかという質問には答えられな

い。

暫く黙って考えていたが、答えに窮する彦

輔に芝山は、手に持った扇子を床に置き、その手

を彦輔の手の上に優しく乗せた。

(以上4月1日放送分)